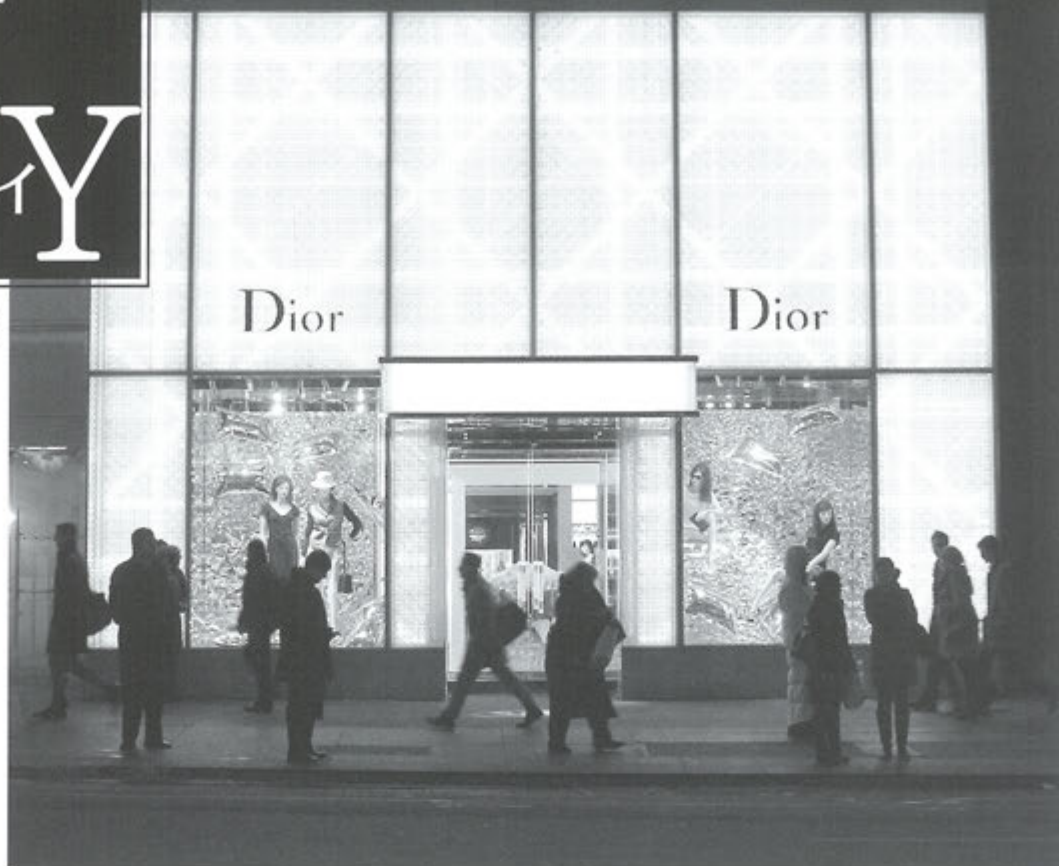


NY エッセイ ②

中瀬 有紀



Christian Dior: 21 E. 57th St., New York, NY 10022 (Between Fifth and Madison Avenues) 2010年12月11日土曜日に公式オープンした新Diorストアは、外壁と日よけのバックライトにRosco社製のLitepad DL 5300とRoscolux 3216が使用され、店舗前の歩道をゆく人の顔の高さで、店舗照明から受けるあかりは、ほぼ100ルクスの均一となっている。

ニュー Yorker が酒(サケ)という日本語を知っているように、マンハッタンでは、多くの酒屋が日本酒を扱っています。ワインの人気に比べると、まだまだ馴染みが薄い日本酒ですが、パーティに日本酒を持参するアメリカ人も珍しくありません。しかし、不思議なことに、同じ銘柄でも日本で飲む日本酒の方が格段と美味しく感じます。

そして、舞台芸術も然り。例えば、1746年に竹田出雲、三好松洛、並木千柳が合作した「菅原伝授手習鑑」の四段目「寺子屋」は有名な歌舞伎の演目のひとつですが、菅秀才のために喜んで身を落とす小太郎と、その死を礼賛しつつも悲しみに耐える松王丸と園生の前の姿を堪能するには、日本で観劇すると良いでしょう。

理由は、西洋と日本における悲劇の差違です。例えば、西洋の代表的な悲劇の筋は、ソフォクレスの

日本酒は、 日本で飲むのが一番旨い。

テーバイ王家を題材にした「オイディプス王」や「アンティゴネ」のように、親族間の殺し合いの末、血族が減びるというものです。また、シェークスピアの「ロミオとジュリエット」のように、子供達の死をもって二家族間の対立が解消することはあっても、自ら我が子を犠牲にして恩ある方のお役に立つという筋を見つけることは難しいです。西洋と日本、共に「死」が悲劇の要ですが、その辛さをグッとこらえる人間の内面を描いた「寺子屋」は日本文化を象徴する悲劇だといえます。

日本で飲む日本酒と日本で観る日本の舞台は、格別です。「美味しいね」と会話しながら飲むお酒と、「良かったなあ」と観劇後に意見交換ができる舞台、それらの根底には、仲間同士で価値観を共有する時間、そして共感の喜びがあります。私は、日本酒の旨さと歌舞伎の楽しさに、渡米後、気がつきました。